大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

QM2における英語：大学教育には英語か米語か

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005881

ＱＭ２における英語～大学教育には英語か米語か

堀江　珠喜

２０１１年８月７日付朝日新聞に次のような記事があった―「ポルトガルと旧植民地のブラジルとでは、単語のつづりなどがかなり違う。ポルトガル政府はいま、違いをなくすため『標準ポルトガル語』を根付かせるのに一生懸命だ。標準といっても、実際はブラジルの言葉に近づけるもので、多くの単語から発音しないＰやＣが消える。今春から新聞で使われ始め、来年は教科書も変わる。」

旧宗主国が旧植民地のいわば方言に合わせ母語を変えるのは、国の財政的理由による。英国にしても、経済・軍事ともに米国に頼るところは大きい。だがイギリス連邦は５４カ国、推定人口 21 億人、地球人口の約三分の一といわれるほどの規模である。元ポルトガル領のモザンビーク、元ドイツ領でベルギー信託統治地域だったルワンダのように英国植民地ではなかった国まで含まれているほど、これに加盟するメリットは大きいのだ。現在でも旧英国植民地以外の国から加盟申請が行われている。イギリス連邦の首長は英国（女）王で、公用語はイギリスの英語である。つまり英国が米語を公用語にする日は来るはずがないのだ。英国言語文化の世界的影響を考えてもそのような事態は一つの例外を除けば想像できない。この例外とはパソコンのスペルチェックソフトで、米国で開発された製品が用いられ英国人は不愉快な日々を送っているそうだ。

日本においては戦後、英語教育が米語教育に替わった。それから半世紀以上がたち中学や高校の「英語」授業では米語が当たり前となった。しかし大学でもそれで良いのだろうか。大学側は「英語教育」に「実用性」と「即効性」を求め、文化・教養よりＴＯＥＩＣなど数値化された結果を期待する。それだけなら米語でも良いが国際的に通用するエリートは育たない。さらに日本では毎年、数百冊の英語教育本が出版されるが「米語」あるいは「英語」にこだわって著されたものは少ない。そんな日本での大学英米語教育を念頭に置きつつ英国客船クイーン・メリー２（ＱＭ２）上で実際に用いられる英語について論じたい。

米国の言語変化

私自身は神戸女学院というアメリカ系ミッションスクールで中学から大学院修士課程までを過ごしたので、当然ながら米語発音を徹底的に仕込まれた。大学英文科一学年前期では、発音学の時間に米人教授のＯＫがでないと放課後居残り練習をさせられる。そして習得できたら研究室を訪れこの教授の前で発音し、許可を得てやっと帰宅できるというほどの厳しさであった。公立高校から進学してきた学生は苦労したようだ。幸い私は中学一年の四月から米人教師のクラスを受けていたので問題はほとんどなかった。この最初のネイティヴ教師は南部出身だったので、今でも「南部貴族」風を真似て西海岸出身者を笑わせるのは私の得意芸である。では米語とはどのような言語なのか。

アメリカ合衆国内でも文化・風習は地域や階級（英国のような階級制はないが経済力、教育レベルにより格差社会が形成され、中産階級でも富裕層と認められるアッパーミド

ルと貧しいロアーミドルとの二分化が進みミドルミドルが激減しつつある現状クラス）によって異なる。それに伴い言語も米語でありながら同じではない。このような理由で、シアトル出身者がニューヨークの大学へ入ったとき、同じ言葉のはずなのに外国に行った感じがしたと言う。確かに東海岸～西海岸は飛行機で約６時間かかる。これはニューヨーク～ロンドンの所要時間に匹敵する。超音速旅客機コンコルドなら３時間余りでこの大西洋横断ができた。すると精神的にこの英米の大都会間の距離が縮まっていたことになる。そして東海岸、なかでもニューイングランドはその名の通り英国寄りであるとも考えられるのだ。特にボストンの米語は英語により近く聞こえる。またカナダはイギリス連邦に加盟しスペリングなど英国流を用いているので、この国との交流が日常的な米国北部は南部に比べて「英語」に慣れているだろう。けれどもシアトルですら、英国の労働者階級やミドルクラスがよく使う“loo”はほとんど通じないと英国人が言っていた。

いっぽう中米に近い地域では、英語どころか、米語がラテンアメリカ系のスペイン語に押されるのは当然だが、今や全米的に英米語の不得意なヒスパニック人口が急増している。２０１１年８月８日付の日本経済新聞によれば、ペンシルベニア州ランカスター郡では人口の五分の三がヒスパニックとなり、この中心都市ランカスター市では「印刷物や標識などを英語とスペイン語の併記に変更。警察官と消防士にスペイン語の習得を義務付けることも検討している」とか。また「かつてスペイン語を『スラム街の言語だ』と言い放った共和党のキングリッチ元下院議長がスペイン語を学び始めたのは、１２年の大統領選でもヒスパニック票がカギを握るとみているから」で、もはや国内の政治的理由で米語が揺らぎ始めているのが感じられる。しかも白人数は「約３０年後には５０％を割り込む見通し」なのだそうだ。もちろんアジアやアフリカからの移民も多い。だがやはり目立つのはヒスパニックの台頭なのだ。

ニューヨーク地下鉄の吊り広告や乗車カードにスペイン語しか記されていなかったり、L.A,の街角でスペイン語の無料新聞が配られる今日である。もちろん多くの工場労働者はヒスパニック系だし、シアトルの高級住宅地で働く家政婦ですら“Me no speak English!”と平然と応対する。つまり米国での経済活動には近年スペイン語が不可欠なのだ。本学経済学部も英語Ｄ科目の代わりに初級スペイン語を教えたほうが、将来中南米はもとより米国に勤務や出張することになるかもしれない学生のためになると、私はかつて大学上層部に進言したが、相手にされなかった。もうすぐ経済学部は改組で消えるが、米国の現実とリンクさせてスペイン語を必修にしていれば、学部の特徴と存在感がアピールできたかもしれない。

英国人の米語嫌い

ともかく移民大国アメリカの言語はすでに１９世紀末から英国においては笑いの対象にされていた。オスカー・ワイルドの短編小説『カンタヴィルの幽霊』にも次のような一節がある―“...we have really everything in common with American nowadays, except, of course, language.” そして２０世紀にはチャーチルのユーモラスな名文句がある―“Americans and British are one people separated only by common language”

今日では英語らしき言語は国際語となり、とにかく通じれば良いとの意見もある。確かにそれも一理あるのだが、せっかくの大学教育において将来軽蔑されないような英語を学生に習得して欲しいと願うのは当然であり、米語ではなく英語にふれる機会もあるべきと考える。

私自身、米語教育を受けたが、それでも英国の名作『くまのプーさん』などを読まされたためか自然のうちに英語と米語のスペリングや発音、文法の違いなどは学んだ。従って center が centre とつづられてもまったく違和感を持たなかったし、英国人との付き合いの多い昨今では米語ではなく英語を使うように努めている。だが近年の学生には中学・高校時代に米語教育が徹底されたのか、受験科目が米語であるためか、ゆとり教育の賜なのか、「英語」の知識を持たないものが多い。centre や theatre のように極めて簡単な単語ですら誤植と思うようで、私の説明を教科書に書き込むのだ。もちろん知らないことを学ぼうという真面目な姿勢は評価できる。だが一方、なぜこのレベルの英語が大学入学までに教えられなかったのかも不思議でならないのだ。だからこそ大学では「英語」も学ばせるべきである。

英国人は米語を軽蔑する。そこには新興国の経済力や軍事力に対する旧勢力のコンプレックスもうかがえるが、同時に歴史的・文化的優越感という裏付けも確実にある。シェイクスピアの独訳が優れているとはよく言われるが、米語による上演などあり得まい。それで『ロミオとジュリエット』はミュージカル『ウエストサイド物語』に変容されなければならないのだ。

英国のアカデミックな世界での米語嫌いは、もっと露骨に表されることがある。オックスフォードで学位を取った日本人銀行員によれば、英国人指導教授は初対面の米国人学生に“Study English!”と開口一番厳しい言葉を浴びせたそうだ。その点日本人は Japanese English なので大目にみてもらえたらしいが、米国からの帰国子女日本人でハーバード卒の外務省留学生は、おそらくはその優秀すぎる米語が原因で学位が取れなかったと噂されている。

また学者ではなくとも、そして直接的にではないが英国の知識人はことあるごとに米語を使う米国人を見下す発言をする。あるときＱＭ２船上で裕福なロンドン在住者たちが、日本人という中立的立場の私に“American people can't understand British humour!”と言った。(このときの can't の発音と humour のスペリングに注意していただきたい。)私が米人教授からワイルドのコメディを学んでこの作家を研究するようになった旨を言うと、信じられないという顔をした。“He was Bostonian”と付け加えると やや納得された。ボストンにはニューイングランドの知識レベルの高いイメージがあるためだ。そういえばこの教授から習ったワイルドの代表的喜劇『真面目が肝心』には shilly-shally という言葉が出てくるが、これもふつうの米人には理解できない。ベルリッツ大阪校の主任教員にすら通じなかった。だがオーストラリアでは使われるようで、本学では豪州からの帰国子女学生も、この意味を知っていた。やはりイギリス連邦の「英語」は「米語」とは異なるのだ。

ホワイトスター・サービス

大型船クルーズ・ブームの昨今だが、なかでもＱＭ２を所有するキュナード社は、英国の名門船会社ホワイトスターの伝統を受け継いでいるとの自負がある。たとえば乗客のいる場所では英語を母語としない同国出身従業員同士であっても英語を用いるというルールが、客室のサービス案内に明記され厳しく守られている。ホーランド・アメリカでも同様の規則はあるらしいが、フィリピン人同士がタガログ語、インドネシア人同士がインドネシア語で連絡を取り合う光景は珍しくない。実際はそのほうが仕事もスムーズに運ぶのではあるまいか。

しかしホワイトスター・サービスを心掛けるキュナード社としては。それが客に不快感や不安を与える可能性を考え、英語使用を明文化したのだろう。(ただしフィリピン人たちが母国で学ぶ英語は米系と思われるし、英語を母語としない乗組員たちは、それぞれ独特の訛りのある英語をしゃべる。)現在キュナード社はアメリカの大手船会社カーニバル・グループ傘下に入っているにもかかわらず、英国流を貫くことで他社との差別化を図り、英国のアッパーミドルを中心にその層と経済・文化レベルが同等以上の欧米人客を確保しようとしているようだ。

従って船内で公の文章に用いられるのは米語ではなく英語である。もしそれを米人が不愉快に思うなら同じカーニバル・グループ傘下のホーランド・アメリカの船に乗ればいい。米語使用の船は多い。だがキュナード社は、その所有船クイーン・メリー２，クイーン・ヴィクトリア、クイーン・エリザベスの名前に恥じないような高級感と英国らしさを備えていなければならず、英語もその大事なポイントのひとつなのだ。

船内のイベントや食事時間、その他の注意事項は前夜、部屋に“Britain Today”(英国発信ニュースのダイジェスト版）とともに届けられる“Daily Programme” で知ることになる。(“Daily Program”ではない。）そして多くのショーは Royal Court Theatre で行われる。(たまに Theater と米語が誤って用いられることもあるが原則として Theatre だ。）インターネットの使用は Internet Centre に行けばいい。

また同じカーニバル・グループのプリンセス・クルーズ や前述のホーランド・アメリカの船では、従業員が乗客たちに対し“folks!”等と呼びかける。高校時代に国際キャンプに参加し、大学生のリーダーからミーティングで注意事項を言い渡されたときのことを思い出してしまった。キュナードでは“Ladies and gentlemen!” と呼ばれるのも高級感の演出に役立っている。たかが言葉だが、されど言葉である。

スパにおいても、ＱＭ２では女性客への呼びかけが “ma'am” であり、しかもイギリス連邦出身の従業員の物腰がとても低く、映画『クイーン』を思い出させてくれた。これは英国では女王や王女への呼びかけにも用いられるほどの丁寧な言葉だ。この船ではキャニオンランチがスパクラブを運営している。米国のスパ会社だがＱＭ２らしい高級イメージを維持しているのだ。

いっぽうホーランド・アメリカに出店する大手のスパでは、客の記入した質問表を見てフィリピン人従業員がいきなりこちらのファーストネームで話しかけてきた。私が自分の名前にドクターの称号を付けておいたにもかかわらずだ。フレンドリーな雰囲気でリラックスさせようということなのかもしれないが、フレンドならチップは不要とばか

りに払わずに部屋を出たら、相手はかなり不機嫌そうであった。しかし（それ以外の理由もあり）気分が悪いのはこちらも同様だ。同船で親しくなった裕福な米人女性にこの話をしたところ、アメリカでもそんな状況ではファーストネームで客を呼ぶことはないと驚き、そんな相手にチップを渡すべきではないと同調してくれた。ＱＭ２では考えられない事態だ。

英国のアッパーミドル客

確かに米国人の中には人間は平等なのだからサービスする側とサービスを受ける側とも対等だと主張する者がいる。人権という意味では同じだが、金銭の受け渡しがある、つまり経済活動が行われる限り資本主義社会においては一時的にせよ上下関係が生まれるのは当然だ。チップはあくまで客が決めるものだから、この制度がある限りサービスする者はより努力が求められる。アメリカでは社会変動とともに言葉と同様、この点でも混乱が生じるようだが、２１世紀になってもなお階級社会を残している英国においては、上下関係は明確でそれが言葉にも表れるのだ。

ＱＭ２はそんな英国文化を代表する客船なのだ。そのかわりサービスされる側の客にもエレガントな雰囲気を守ることが義務付けられている。特に夜のドレスコードは重要だ。他社では formal と smart casual のどちらかの設定となるが、キュナードでは formal、semi-formal と elegant casual の３種類のうちからの設定となり smart ではなく elegant なる言葉が用いられているのも、この船名に相応しい英国的高級イメージで、乗客にある種のプレッシャーと満足感を与える意図がうかがえる。きちんとした服装で優雅な雰囲気に浸れば、自ずと respectable なマナーや言葉を使いたくなるものではあるまいか。

英国では育ちの良い人間はサービスする者に対して丁寧な言葉を使うと聞く。確かにキュナードのクイーンズグリル（昔で言うところの一等客用食堂で二等はプリンセスグリル、その他の客はブリタニアレストランを使う）で隣席だったケンブリッジ出身の英国人夫妻は、ウェイターに対して丁寧な言葉“Excuse me, ...” や“Thank you very much, indeed,” “ Could you please. . . ？” を連発していた。

そんなことくらい初級英会話本に載っているとの反論もあろうが、英米の実社会では意外に使われていないのがこれらの言葉だ。シアトルの白人タクシー運転手は道に迷って郵便配達人を呼び止め、行き方を教えてもらうにあたって“Excuse me” とも “Thank you”とも言わなかった。相手の郵便配達人もそれで当たり前のような表情だった。ちなみに私の旧友の英国男性が、やはり道を尋ねるとき“Excuse me” や “Thank you” を言わないことを長年不思議に思っていたのだが、その母親が労働者階級の出身と聞いて納得した。会ってみるととても感じの良い母親だし、彼も現在はアッパーミドル並の生活を送る収入を得ているのだが、身に付いた言葉の使い方が本来のアッパーミドルとは異なるのだ。

もっとも逆に考えれば、アッパーミドル出身でない者が上位階級の言葉を真似るのは俗悪なのかもしれない。けれども将来、学生たちが英国やイギリス連邦のアッパーミドルと交際する可能性を考えれば、米語ではなく英語、しかも恥をかかないような品の良

い階層の言葉を教えるべきであろう。もちろん“Excuse me” や “Thank you very much” だけではなく内容を形成するための文化的知識や思考能力が必要であることは言うまでもない。

もともとQM２はＱＥ２のように大西洋横断用客船（ライナー）の伝統を受け継いでいる。タイタニックの時代ほど厳格ではないが、ほとんどのクルーズ船がモノクラスである今日、食堂を分けたりパブリックスペースを制限するなどの「階級制度」が存続し英国文化が感じられる。とはいえ誰でもその料金を払えば上のクラスに乗れるわけで、いわば金で買える「階級」ではある。しかしそこではより品の良い英語が話され、より respectable なマナーや社交術を知らなければ場違いで居心地の悪い思いをするだろう。

船上で親しくなった上クラスの英国女性からその女友達をグリル客専用ラウンジで紹介されたとき、彼女は微笑んで片手を差し出し“How do you do?” と言った。私もその手を軽く握って“How do you do?” と返した。これも日本のオーソドックスな英会話本には載っている初歩的な挨拶だろう。けれども現在日本で販売されている訳知り顔のネイティヴ著者本、たとえば西森マリーの『ネイティヴ感覚で英会話』ではこう断言されている―「よっぽど公式な場でないかぎり、人と初めて会ったときに How do you do? なんてあいさつをする人はめったにいません。ハッキリ言って、わたしはこの１０年間、How do you do?と言った記憶も、耳にした記憶もございません。」

これについて私は拙著『いい加減な人ほど英語ができる』で、次のようにコメントした―「そりゃ、アイリッシュ・パブをほっつき歩いていたら、そんな機会はないだろう。」つまり西森マリーのレベルのネイティヴ教師に大学のエリート教育は任せられないということだ。英国のしかるべき階級では、私が体験したように、何も「よっぽど公式な場」でなく日常的に用いられる。しかし英国を旅行していても、あるいは留学していてもそのような階級に紹介されなければ、耳にしたり口に出す機会も無いだろう。

だが船内は「呉越同舟」との言葉があるように、日常社会よりはるかに乗客同士に連帯感が生まれ、紹介なしに“Excuse me”で話しかけても不審がられることはない。乗船時にパスポートや荷物が検査されテロリストはいないとか、このクルーズ料金が払えるだけの経済力があるといったことがお互いに信頼と安心感を与え合っているのだろう。従って誰とでも気軽に話ができる。英会話の練習には外国客船、特にエリート教育にはキュナードのクルーズが適していると考えられよう。少なくともその間は（よほど多くの日本人乗客がいない限り）英語漬けの毎日を送ることになるのだ。

QM2の英国文化

寄港地や航路にもよるが、ＱＭ２は英国人客が多いのが特徴だ。サウサンプトン～ニューヨーク６泊７日の航海では、たいてい乗客約２６００人中、英国人が約２０００名だ。ちなみに私が乗船した２０１１年世界一周の第五区間ドバイ～サウサンプトンでは、総数２４５１人中、英国人は１１４４名だが「イギリス連邦」としてはカナダ人１５５名、オーストラリア人２２０名などを含め、総勢１５７３名にのぼる。つまり彼らは「米語」ではなく「英語」を使うと考えられる。また旧加盟国のアイルランド人１５名も（国家としては米国企業からの投資などの経済支援を受けているものの）地域的には「英語」

を用いるはずだ。

文化的にもアイルランド作家は英文学に含まれる。オスカー・ワイルドもその一人だ。さらに香港（中国ではなく香港と明記されている）１０名も英国支配下で英語教育を受けたと考えられる。これらを加えれば「英語」派は１５９８名になり米国人客５４４名の約３倍となる。

ただしこれらはあくまでどの国のパスポートで乗船したかというデータを基にしただけの集計で、民族までは特定できない。たとえば中国系カナダ人やベトナム系アメリカ人は、それぞれ「カナダ」や「米国」客として数えられる。いっぽう米国生まれの米国人であっても、他国のパスポートを取得し用いている場合も考えられる。２００１年９月１１日直後、米国のパスポート使用に危険を感じたイタリア系米人が米国のイタリア総領事館に詰めかけ、イタリアのパスポートを入手した。この航海ではアラブ圏内を通るので、イスラムに嫌われる米国より先祖の母国のパスポートを用いた可能性も否定は出来まい。だがあくまでそれは少数派であり、「英語」が「米語」を制している事実に変わりはない。船内の印刷物だけではなく実際に多くの乗客たちが 「英語」を、この閉ざされた空間で使っている。つまり「公用語」なのだ。

この第五区間の乗務員数は１２３８名で、その半数強の６４５名はフィリピン人である。だが発展途上国出身者の多くが従事するのはキッチンやランドリーなど乗客の目にふれない場所での労働や、甲板掃除など日常的には簡単な挨拶以外、乗客と話を交わす必要のない仕事である。そんな彼らでもキュナードで働く限り英語らしき言葉は話せる。上品とはいえなくとも日本の平均的大学生よりもリスニングとスピーキング能力ははるかに上だ。（逆に言えば、現在の日本の大学生レベルではキュナードの甲板掃除の仕事ももらえないことになる。ただしこのような「聞く」や「話す」は生活がかかれば短期習得できるものだ。それに比べて一夜漬けで学べないのは文化・教養であり、エリートを目指すならこれをなおざりにしてはなるまい。ＴＯＥＩＣの点数だけが目標の英語教育では一時的に世間受けしても本当に学生の近未来に役立つわけではない。）

さて乗務員のうち英国人は９４名で米国人の１４名に比べてはるかに多い。このときの船長もサウサンプトン出身の英国人だ。さらにイギリス連邦出身者としては２５２名で乗組員全体の２割ほどだが、船長を筆頭に要職・中枢部を受け持ち、カクテルパーティなどで客との交流もある。

最近はレストラン等の接客係に東欧や旧ソ諸国出身者が増えてきた。彼らはもちろん外国語として英語または米語を学んできたわけだが、イギリス連邦出身者が多い職場で働いていればその発音や言葉遣いは周囲の色に染まってゆく。つまりＱＭ２に長くいれば英国風の英語になってゆくはずだ。（このような変化は英語を母語にしている者においてすら起こるようだ。サンフランシスコに２０年住む英国男性は、帰英すると「米国人のように話すようになった」と親戚や親友たちに、からかわれるらしい。しかし米国生まれの米国人の米語に比べると、私の耳にはしっかりと「英語」と聞こえるのだが。）

当然、私の米語も近年、ロンドンのオスカー・ワイルド・ソサエティに参加しているためか、英国化しつつあるらしい。特にロンドンからニューヨークへコンコルドで飛んだ直後は、グランド・ゼロで出会った米人に英国在住だと思われたし、ＱＭ２船上でも、

長年ロンドンでホテルを経営するギリシャ人が「日本人なのはわかっているけれどロンドンに住んでいるのではないのか」と驚いていた。

だが、そのわずか一月まえに、サファイア・プリンセスでメキシカン・リビエラをクルーズしたときは、乗客の大部分が米国西海岸出身者だったせいか、私も無意識に米語力を発揮したようで、日本人だと初めに言っているのに、食卓で同席した米人国客たちからはカリフォルニア在住だと勝手にみなされた。

「英語」と「米語」は私もある程度は使い分けられるので、大学において半年は英国作家の文章を「英語」の発音で読み、半年は米国作家の文章を「米語」の発音で読むようにしている。そして授業はできるだけ「英語」で説明、解説、質問をすることによって学生が「英語」慣れるよう努めている。

「英」対「米」

さて２０１０年ニューヨーク発着のＱＭ２ニューイングランド１０日間クルーズでは、比較的米国人客が多く感じられた。クイーンズグリルで私の右側テーブルには前述のケンブリッジからの英国人夫妻、左側にはテキサス出身の米国人夫妻が毎食座っている。テーブルは乗船時に告げられた指定席を航海中ずっと用いる。そこで私は英国らしい英国人と、米国らしい米国人のあいだで両者の違いを観察し実感する良い機会を得たのだ。

彼らは対立もしなかったが、私のテーブル越しになるためか、話に花が咲くということもなかった。経済力は同じでも文化が異なり話題が合わなかったのかもしれない。なにしろ私がケンブリッジを訪れたのは３０年前（ワイルドはオックスフォード出身なのでケンブリッジに用事がないの）で、街が変わったかと尋ねたところ、３０年では何の変化もないと平然と答えるのが英国人なのだ。アメリカの都市部なら、日本同様、３０年間の変貌ぶりがすさまじいのが当たり前だ。

またこの英国女性はベジタリアンで、朝食にはＭａｒｍｉｔｅが必要だ。これはオーストラリアのＶｅｇｉｍｉｔｅに相当するペースト状の栄養食品だが、いずれにしろテキサス夫人はご存じなく、私がこれを少しもらいキュウリの輪切りにつけて美味しそうに食べるのを見て、悲鳴を上げ気持ち悪そうな顔をした。もちろんそのときまでに私と彼女とは親しく冗談を交わす仲になっていた。あくまでそんな良好な人間関係を前提とした米国流の笑いを誘う演技と、私も十分に心得ている。何事についても大げさな反応を示すのが米人なのだ。それに対しケンブリッジ夫人は静かに一言“Good combination”とコメントした。

さらにテキサス夫人とは映画、ケンブリッジ夫人とは英国演劇について話が盛り上がった。本学上層部には、残念ながらこのような場面を想定できないためか、英語教育で文化を教える必要はないと発言される方がいらっしゃるが、私が２００９年度末に調査したところ本学の学生たちは明らかに語学教育とともに文化力の向上を求めている。

ＱＭ２ではＲＡＤＡ（Royal Academy of Dramatic Art)がシェイクスピアの人気作品やワイルドのコメディを演じたり、英詩を朗読したりする。上映される映画も００７シリーズや『キングズスピーチ』など英国らしい作品だ。

さて英国人客にとって３時半からのアフタヌーン・ティは、一日でもっとも大事なイ

ベントのようで、この時間帯に船がどんなに景色の良いところを通っても甲板から英国系は姿を消す。面白そうな催しが重なっても、英国系はアフタヌーン・ティを優先させる。そこでのおしゃべりもクルーズの楽しみだが、当然「英語」力と文化力に基づく社交力が必要である。なぜならそこにいるのは大部分がイギリス連邦の客だし、グリル客専用ラウンジではより文化的な英国流ユーモア・センスが発揮される。ときには大きな会場でTea Dance が催されることもあるが、テキサス夫人はその意味がわからず、私に尋ねられた。日本人にそのような英語の意味を質問するのは米国人の素直な一面の表れなのかもしれない。幸い私はロンドンのホテルでなんどもティ・ダンスには参加しているので詳しく説明することができた。(ちなみにそれ以前のＱＭ２航海では、フランス人客に英文メニューの“French toast”の意味を尋ねられ“pain perdu”と答えたところ納得された。)

２０１１年世界一周第五区間では、私のテーブルはカナダ人夫妻とミズーリからの米国人夫妻の間だったので、英国系と米国人との違いを興味深く観察しながら積極的に双方とおしゃべりをした。この両カップル同士は挨拶をするだけで、仲が悪いわけではないがわざわさ私を越して話す必要もないようだった。ＱＭ２に乗船しクイーンズグリルで食事をする生活レベルの米国人は社交慣れしてそれなりに愉快な会話が楽しめるが（個人差もあるだろうが）カナダ人には洗練された英国人ほどのユーモア・センスはうかがえず、話題はケベックにおける非フランス系への差別といった真面目なものばかりとなり、ミズーリ夫妻との笑いの絶えないおしゃべりとは対照的なものとなった。このミズーリ夫妻は毎日３冊読破するほどの読書家であるのに対し、カナダ夫妻は驚くべき健啖家で、毎食、数多くのナイフとフォークがテーブルに並べられていた。ついでながら最近の米語の傾向としてdelicious より very tasty を使うようだ。

しかるべき「英語」の教育

さて船上のリーダーは船長であり、客といえども彼の指図に絶対服従しなければならない。もちろん宗教は自由でユダヤの過ぎ越しのディナーが場所限定で催されるし、カトリックのミサもある。しかし絶対的に多いのは英国国教会信者を含めたプロテスタントで、日曜礼拝では英国人船長が説教をする。２０１１年４月１７日のワーナー船長による説教は、“An interview with God”というタイトルで、短いが英国流ユーモアを込めたレトリックを駆使し、かつキリスト教徒でなくても現代人が共感できる内容であった。非英語圏出身者も理解できるような簡単でしかも力強い言葉が用いられていたが、dreamed ではなく「英語」流に dreamt と言われた。これを聞き逃してはこの話の設定が理解できない重要語で、やはり「英語」力の必要性が実感された。

こう書いているものの私自身は英国が嫌いである。しかしそれは望ましい英語教育とは無関係の一個人の思想と感情によるものである。(本学には進化論を否定するキリスト教原理主義的理系教授がいて、院生の論文を認めようとしなかったとの話を聞いたが、個人の宗教や信条を学生に押しつけるべきではない。)

学生の将来を考えたとき、発音や表現などどのような英米語を教えるべきなのか。ヒスパニック化されつつある米国やイギリス連邦加盟国の増加など国際情勢や近未来を視

野に入れ、そろそろアメリカ一辺倒の語学教育とネイティヴ信仰を見直すべきときがきているのではあるまいか。現在、英国内にもさまざまな人種問題が起こっている。人種問題の多くは白人と有色人種との間に起きるもので、いわれなき差別から身を守るためにも学生が respectable な言葉、具体的には英国のアッパーミドルが使うような英語を習得するべきと考える。それは米国においても軽蔑されることのない言葉である。つまりストリート・ラテンならぬストリート・イングリッシュではなく、いわばサロン・イングリッシュ、具体的にはパブやファーストフード店ではなく高級レストランで通用する語学・文化教育を提唱したいのである。ＱＭ２のフィリピン人バトラーが、グリル客かそうでない客かは言葉遣いと服装、歩き方などのマナーで、９０％は見分けがつくと豪語していた。どんな言葉遣いが、自分にとって得なのかはこれからも明らかだろう。学生にもそのような英語を習得させるべきである。